HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人間実存における死の意味に関する考察
Author(s)	細田, 信一
Citation	基督教学, 39, 31-33
Issue Date	2004-06-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46678
Type	journal article
File Information	39_31-33.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

人間実存における死の意味に関する考察

細田信一

一．「泣くな。娘は死んだのではない。眠っているだけである」（ルカ福音書八章五二節）。イエスはそう言われてヤイロの娘を死から蘇らせました。この福音書の記事は人類がこの地球上に誕生してから、変らない願いであると言って良いでしょう。死は人間にとって、やはり忌むべき事なのです。宗教はこの死の問題解決として出現したのだ、言っても過言ではありません。永遠の生命＝これは人類の願いです。ところで、日本における浄土教の阿弥陀仏の事ですが、この名称はサンスクリット語でアミターユスと言い、永遠の生命を意味するそうです。故に阿弥陀仏の別名を無量寿と呼びます。もちろん、この無量寿とは霊的生命の意味ですが、その本心は肉体の生命が、永遠である事を願っているのかも知れません。しかしながらこの切なる願いにも関わらず死は誰にでも必ずやって来ます。ここに死の意味を問う必要があるのです。たとえ若い人であっても、いや若いからこそ良い人生を送る為には、今から考慮しておく必要が有ります。すなわち良い人生を送る為には、何時でも自分の死を心に刻んで生きて行く事だと言って良いでしょう。実は良い人生観は良い死生観から生まれるのです。この逆では無いと思います。有名な精神科医のV・E・フランクルは、死が持っている意味として、もし人が死なないとするなら義務や責任を果たすのに永久の引き伸ばしをするであろう、と言う意味の事を言っています。すなわち「死は実際に生命の意味を破壊しうるのであろうか、そうではなくて反対である。何故ならば、もし我々の生命が有限ではなく、無限であったならば一体何が起きるであろうか。もしわれわれが不死であったならば、われわれは当然あらゆる行為を無限に延期する事ができるし、それを今行おうが、明日なそうが、あるいは明後日、一年後、十年後に行おうが同じことである。しかしわれわ

れの未来の越え難い限界、及びわれわれの可能性の制限としての死に面して、われわれは生涯の時間を利用しつくし且つ一回的な機会を…その『有限な』総計が全生涯を示すのであるが…利用しないでは過ぎ去らしめないように強いられるのである」（フランクル著作集二、霜山徳爾訳『死と愛』みすず書房刊、七五頁）。すなわちタイムリミットが人間の責任性に意味付けをしているのです。時間の制限こそが人間を倫理的にしているのです。この人生は一回限りです。もし人間が死なないのなら、この人生は尊くも無く逆に無価値になると考えます。理由は何時でも手に入り無限に有るものなら、それを大切にする意味が無いからです。この時しか無い、これしか無いから尊いのです。

二、ところで、既に少し触れた様にキリスト教は死を解決した宗教です。他の宗教においては、死後の生命は認めますが、キリスト教と根本的に異なる事は、「復活」が強調されていない事です。キリスト教においては、信仰の核つまり最も重要な事はこの「復活」にあります（先にも述べた様に、他の宗教にも、この死者の復活と言う信仰が存在する様ですが、キリストの復活ほどに際立った記述と、それに続く信者の復活を明確にした宗教は他に有るでしょうか？）。すなわちこの事は、コリント人への第一の手紙一五章一七節および二〇節から二四節にかけて明確に述べられています。これはカトリックの信仰宣言にも、その最後の所に、古い方の典礼文では「死者のよみがえりと来世の生命とを待ち望む」と書かれてあり、新しい典礼文では「からだの復活、永遠のいのちを信じます」と書かれてあります。それ故に、初期のキリスト教では、文字通りキリストの肉体が復活したと信じられていたと言う事なのです。この事はあえて聖書の箇所を示す迄もない事です。それが何時の間にか、殊に近世になってからは、キリストの霊だけが復活したのだとか、もつと極端な解釈になると、復活とは精神的な意味にあるのだと言う解釈がまかり通る様になりました。これは一見、自然科学的な合理的な解釈の様に思えます。しかしそれではキリスト教ではありません。何故キリスト教が、度重なる迫害にもかかわらず、ヨーロッ

パ全土に普及して行ったのかと言えば、外見上は隠されてはいるものの、その本当の理由は、誰しもが願う永遠の生命にあったと言うべきでしょう。殊に初期キリスト教は、イエスが行った様々な奇跡物語に力が注がれていたと言う事です。むしろ十字架が教会のシンボルになったのは、それより少し後の様です。

三. 現代の自然科学では、死後の世界は無い事になっていますが、果たしてどんなものでしょうか？ 第一に自然科学は時代と共にその学説が変化して行きます。この変化すると言う事は未だに何一つ分かっていない証拠なのです。特に神秘の世界等はなおさらです。第二に自然科学の依って立つ土台は、その根本は仮説に過ぎないと言う事です。我々は自然科学のもたらす、工業技術的成果に目を奪われているだけです。例えばコンピューターとか、バイオテクノロジーとか、宇宙開発とかの様々な成果です。しかしそれによって物事の根本が解明されたわけではありません。ところでここに、かなり信憑性の有るデータが有ります。それはエリザベス・キュブラー・ロス医師の書いた『「死ぬ瞬間」と臨死体験』（読売新聞社、一九九九年）です。また日本では、ルポライターの立花隆氏の『臨死体験』（上・下巻、文芸春秋、一九九四年第一刷）が有ります。これ等は九死に一生を得た人の臨死体験ですが、科学者が幾ら疑惑の目を持って観察しても、否定出来ない幾つかの事実が有ります。だからと言ってこれ等の事実は、それがそのまま神秘の世界が存在する事の明確な証拠にはならないでしょう。もちろん全く否定し去る事も出来ません。そこで、この自然科学の限界を超えようとして「ニューサイエンス」や「トランスパーソナル心理学」が登場して来ました。しかしこれ等の学問の将来性は分かりませんが、少なくとも従来の自然科学を決して否定するものではなく、その欠陥を補充するものである事ははっきりしています。その意味では非常に重要です。

四. 結論として、死は実存に意味を付与する人生上の事件である事。死は決して忌むべき事では無い事。死が有るからこそ、生きている今が尊いのだと言う事です。